

沿線住民が持つ芸備線への想い—向原駅・吉田口駅・甲立駅—

向原

「私は元国鉄職員ですが、機関士の姿に憧れたことが、当時の国鉄に入るきっかけでした。西日本鉄道OB会三次支部向原分会の会員数は現在54名で、年に2回駅構内美化活動をし、3か月に1回会合を開き、情報紙を発行し、情報を共有しています。

昔は芸備線の通勤・通学利用者が多く、向原駅の利用者が1日平均2,600人になることもあったと思います。また、貨物・小荷物の取扱いもあり、製材所から出荷された製材や近隣で採れた梨、桃などの果物など輸送するものが多く、まちも栄え、駅前の食堂が賑わっていたことをよく覚えています。

今後は活性化の取組として、三江線と一緒に、芸備線沿線の観光資源をPRしていけばよいのではないのでしょうか」



鉄道OB会三次支部向原分会
おかざき 耕二 会長

吉田口

「高校を卒業して県北の東城町に就職しましたが、休日には急行ちどりに乗り込み広島市内で遊び、帰りはポケットウィスキーとするめを買っていたので、3時間の長旅も苦になりませんでした。

7年前から広島市内の職場に芸備線で通うようになり、出勤時に清掃活動されている地域の方々と話すようになったことがきっかけで、地域の事に興味を持つようになりました。現在、振興会事務局長として、毎週集まって地域の将来のための活動を行っています。昭和の大合併によって、地域が寂れていく経験をした小原地域だからこそ、今、危機感を持って地域振興活動ができています。皆さんの協力があるからこそ地域が活性化すると思います」



小原地域振興会
たにくち けんいち
谷口 恭一 事務局長

甲立

「旧国鉄時代、機関士として山陽本線では貨物列車、また芸備線では貨物や旅客列車を運転していました。当時は通勤者が大変多く乗車され、材木や米も多く集荷されていました。まさに、鉄道輸送は文化、物流の主役でした。三次から備後落合方面に乗務するときは、古びた高い鉄橋の上を通過する時や雪の降る日の運転は、怖くて緊張したことを思い出します。

家の庭には、旧甲立駅にあった植木の切り株があります。朝夕見て思うことは、昔の駅舎はなかなか趣があり、利用者の生活の匂いが感じられていたなあと懐かしくなります。今後、芸備線の賑わいを取り戻すには何よりも『人の力』が必要だと思います。100周年を機にその力が集まることを期待しています」



鉄道OB会三次支部甲田分会
つちもと よしお
土本 義雄 前会長

県北地域の宝を復元中

現在、旧三次市文化会館にあるSL48650号機（通称「ハチロク」）の復元作業を、手作業でほぼ毎週末行われている湧廣さん。このSLは保存状態がとても良く、見に来られた方には、こんなにきれいに残っていたのかとよく驚かれるそうです。

「復元作業では、文化財としての価値を失わないよう、部品は使われていたものを使用するように努めています。将来は、走ることはできないが操作ができる、運転士用シミュレーター並みのものにしたいと考えています」と湧廣さん。また、今年に入ってから、ある地域に残されていた蒸気機関車D51の車両が解体されてしまったことについて、「解体してしまえば、例え何億円積もうが元には戻りません。このSLは、芸備線、三江線、福塩線の歴史を知る大切な文化財です」と力強く語ります。

以前は船や新幹線の製造の仕事をしてきたため、車両を修理するある程度の知識はある湧廣さん。しかし、どう修理したらいいのかわからないときは、本を読んで調べたり、実際に作業してみて検証されています。「40年ぶりに動いたときは、感動しますし、嬉しいです」

芸備線の歴史を後世に伝えていくため、復元作業終了後は子どもたちに社会見学に来てもらうなど教育にも活用してもらいたいと考えておられます。また、現在ボランティアを募集しており、「鉄道に詳しくない方でも、簡単な復元作業はできますので、お気軽にご参加ください」



SL 48650号機の外観と
塗装を剥がす作業を
行っている様子



新しい目線で、新しい市の魅力を繋げていきたい

福岡県太宰府市から安芸高田市へ移住した松浦さんと松延さんは、7年前にトラブルに巻き込まれた松浦さんを松延さんが助けたことをきっかけに出会いました。その後二人は、太宰府市の様々なイベントやまちの活性化に関わり、その後鉄道好きが高じて鉄道のジオラマ製作を請け負う「鉄道模型から始まる地域活性化の未来を広げるアムール工房」の看板を掲げました。ジオラマに限らず神輿や料理を作ることもありました。「要するに、何でも屋です」と二人は言います。

鉄道ジオラマ製作で二人が心がける事は「依頼者の思い出と、そのまちにしかない四季の風景を大事にする」ことだと口を揃えます。依頼主がプロポーズした駅を再現するなど、これまで多くの人の笑顔を引き出されてきました。現地で撮影した動画や写真をインターネットで制作現場に送り、期日に間に合わせるために「青春18きっぷ」片手に長距離移動することもあったそうです。「締切もあったので、激しいやりとりをしたけれど、今では良い思い出です」と松浦さん。「『いつでも眺めていますよ』という依頼主の声を聞くと一番嬉しいですね」と松延さん。そしてお二人は「私たちのような新しい市民が気づく、新しい安芸高田市の魅力を繋げていきたい」と「発見の輪」が大切だと語っていました。

現在、吉田口駅再現ジオラマは、灰塚ダム近くのカフェ「湖畔の森」に展示され、お二人は、そのカフェで店長兼料理人として活躍されています。



松浦さんと松延さんによって作られた吉田口駅再現鉄道ジオラマ。それを興味深そうに見る男の子



まつうら ゆう まつのぶ まこと
松浦 優さん、松延 誠さん
(愛称：ヒゲさん)

人々の想いのつまった芸備線

沿線地域の一員として、元国鉄職員として、長年芸備線に携わってきた人たち。100周年を機に、まちおこしのために芸備線を活用している人たち。芸備線に関わってきた皆さんのお話を伺いました。



みずの ひでお
水野 秀夫さん

写真展から、安芸高田市の魅力を発信

「数年前に2015年が芸備線100周年の年だと気づき、三江線ラッピング車両『三江線神楽号』の情報なども届いていたので、芸備線もこの機に何かできないかと考えついたことが、写真展を開くことでした」と語る水野さん。水野さん自身が撮影したものはもちろん、元国鉄職員さんや鉄道ファンからたくさんの写真をお借りし、開催にこぎつけたそうです。

写真展は今年の4月から約1年間開催し、春夏秋冬の季節ごとに写真を入れ替え、7月上旬に夏シーズンに撮られた写真に切り替える予定です。

「安芸高田市には芸備線のほかにも、神楽や毛利氏関連史跡など、たくさんの宝がある」と言う水野さんは、そのことを写真展に訪れた方々にわかってもらうために、観光ポスターを展示会場の外に貼って、安芸高田市というまちをPRしています。「地元の人が何でもないと思っている催しや行事を、市外から来る人がめずらしがったりおもしろがったりすることで、地元の人でもそれが立派なものだと気づくと思います。外部の視点からその良さを掘り起こしたい、と考えています。多くの方々が観光のために安芸高田市へ訪れ、それによって地元の人にも新たな魅力に気づく、という良い循環が生まれればいいと思っています」芸備線に惹きつけられる人たちに、安芸高田市が持つ皆さんの魅力に気づいてもらえるよう、熱意を持って取り組まれています。



来場者に説明をする水野さん



写真展の外観と、
写真展で思い出に
浸る来場者のみなさん

